

国際カヌー連盟（ICF）のキャッチフレーズは、英語の *Always Moving Forward* ということばであるが、このことばこそが艇を使用するスポーツの中でのカヌーの特徴を示していると言える。スポーツとしてのカヌーには様々な楽しみ方があり、競技の種類も多岐にわたる。そのうち、オリンピック種目はスプリント競技（略 CSP）とスラローム競技（略 CSL）の2つである。スプリント競技（CSP）は、湖沼や池などの静水面に設営された直線コースを一斉スタートでひたすら速く漕ぐダイナミックな競技である。一定の距離（200m, 500m, 1000m）をレーン（コース）を決めて漕ぎ、着順とタイムを競う。スラローム競技（CSL）は、荒瀬や渦のある急流に設置されたゲート（2本もしくは1本の棒を吊るしてつくる旗門）を順番に漕ぎ、タイムとペナルティの有無を競うタフな競技である。この競技では、正確にゲートを通るテクニックとスピードが要求される。

## ◆カヌースプリント（CSP）競技

### 1. 競技・種類の説明

#### （1）種目説明

CSP は、カヤック（Kayak 略 K）とカヌー（カナディアン）（Canoe 略 C）部門に分けられる。カヤック（K）部門は、漕者が艇の進行方向に向かって坐り、両端にブレード（水かき）のついたパドル（櫂）を左右交互に漕ぎながら艇を前に進める。カヌー（C）部門では、漕者が艇の進行方向に向かって立膝の姿勢をとり、片方にブレードのついたパドルで左右どちらか片方のみを漕ぎながら艇を前に進める。

#### （2）種目

- ・男子カヤック1人乗り（K1） 1000m
- ・男子カヤック1人乗り（K1） 200m
- ・男子カヤック2人乗り（K2） 1000m
- ・男子カヤック2人乗り（K2） 200m
- ・男子カヤック4人乗り（K4） 1000m
  
- ・男子カヌー（カナディアン）1人乗り（C1） 1000m
- ・男子カヌー（カナディアン）1人乗り（C1） 200m
- ・男子カヌー（カナディアン）2人乗り（C2） 1000m
  
- ・女子カヤック1人乗り（WK1） 500m
- ・女子カヤック1人乗り（WK1） 200m
- ・女子カヤック2人乗り（WK2） 500m
- ・女子カヤック4人乗り（WK4） 500m

#### （3）競技方法

レーン（コース）は、幅9メートルで1レーンから8レーンまであり、各艇はフライング防止のための自動発艇装置（スターティングブロック）に艇の先端を入れて横一線に並ぶ。「Ready Set Go」というスターターの発声に続き、ス

タートを合図する電子音やピストルの音で一斉にスタートする。ゴールラインに艇の先端が早く着いた艇から、1位、2位の順となる。国際カヌー連盟（ICF）の競技規則に示された勝ち上がり方式“Division System”による予選・準決勝が行われ、決勝へは8艇が進む。

#### （4）競技方法

漕者が「Ready Set Go」の合図の間、前にパドルを動かした場合、「フォルススタート（False Start）（フライング）」を宣告され、同じ漕者が2度フライングすると失格となる。競技中は、幅9mのレーン（コース）の中央を漕がねばならず、レーンからはみ出したり、レーンの中央から永く離れると失格となる。なお、レーンを示す浮標（ブイ）は12.5mおきに設置されており、ゴール手前の100mは全てのブイが赤色で示される。レース中転覆した場合や艇やパドルが壊れてゴールできない場合も失格となり、また、艇の重さがレース後の検査（検艇）で規定の重さに達してしない場合も失格となる。なお、2人乗りや4人乗りの競技の場合、クルーのメンバーが全員乗った状態でゴールしなければゴールと認められない。

## 2. 今大会のみどころ

#### （1）出場権獲得までの経緯

ロンドン大会では、オリンピックの前年の世界選手権大会（ハンガリー・セゲド）で6位（種目によっては8位～10位）までに入った艇の国と大陸ごとに開催される大陸予選会（Continental Qualifier）でランキング1位になった艇に出場資格が与えられる。なお、大陸予選会に割り当てられる艇の数には限りがあり、たとえばカヤックペア（K2, WK2）は、ヨーロッパを除くアジア・アフリカ・アメリカ・オセアニアの4大陸うち、世界選手権の同種目上位の3大陸のみに割り当てが与えられる。なお、カヤックフォア（K4, WK4）は、世界選手権にのみ出場枠が与えられる。出場権の獲得は、一人の選手に複数の資格を与えられず、1名につき1枠のみが与えられる。複数の種目で有資格となった選手の資格分は、ランキングにおいて次の選手に配分される。

日本代表チームは、200mの短距離種目をターゲットとしており、前年の世界選手権大会において、できる限り多くの資格を得ることを目指した。また、世界選手権大会で資格が得られない場合、アジア大陸予選で確実にランキング1位となるために、K2, WK2において、4大陸のうち3大陸のみに与えられる出場枠をアジアに日本自らがもたらすことを至上命題とした。世界選手権では、前年200m WK1において、銅メダルを獲得した北本忍が金メダルをにらみながら、メダル獲得を目指した。予選では、全体のタイムで2位、準決勝も無難に通過したが、決勝では僅差で敗れ4位となった。しかし、このことにより、北本はロンドンの出場枠を獲得した。残念ながら、世界選手権大会におけるオリンピックの出場枠はこの1種目のみであったが、松下桃太郎・渡邊大規ペアの男子K2 200mで、ライバル国の強敵南アフリカ共和国を破り、世界選手権において、アジアトップである日本自らがアジアに男子K2 200mの枠をもたらした。

2011年10月12日～10月16日の間、イランイスラム共和国のテヘランで、アジア選手権大会がアジア地区のロンドンオリンピック大陸予選会として実施された。この大会では、松下・渡邊ペアのK2 200mが1位となり、出場権を獲得し、また、WK1 500mで2位となった大村朱澄およびC1 200mで3位となった阪本直也が中国はじめ上位選手が既に資格を得ている関係などから、オリンピック出場枠を獲得した。

#### （2）今大会の目標

世界選手権やワールドカップなどでもメダルを獲得し、他国のライバルからも強い注目を集めている北本がWK1 200m

で金メダル獲得を目指す。また、ペアとしてはもちろん、シングルにおいても、世界ランキング上位のタイムを出し、伸張著しい松下・渡邊ペアが K2 200m と K1 200m の両種目で上位入賞を目指す。また、北本は 500m の WK2 においても、大村とともに上位入賞を目指し、C1 200m の阪本は、決勝進出を狙う。

### (3) 日本チームの特徴

アテネ・北京と 2 度のオリンピックを経験し、北京では WK2 5 位、WK4 6 位と 2 種目で入賞を果たしたエース北本を除けば、4 名がオリンピック初出場となる。200m 種目を中心とした若いチームであるのが特徴で、200m におけるスタートダッシュは世界のトップにも引けを取らない。オリンピックでは、チャレンジ精神を全面に出し、積極的なレースを展開したい。マルチサポートの強力な支援を受けながら、カヌー競技の NTC のある石川県 小松市での合宿に続く、海外拠点メキシコでの高地合宿、さらに直前のフランス合宿で、世界一合理的なフォームを目指し、スタートの反応および瞬発力に磨きをかけるとともに後半の艇の伸びを改善し、メダル獲得、上位入賞を目指したい。

## ◆カヌースラローム (CSL) 競技

### 1. 競技・種目の説明

#### (1) 種目説明

スプリントと同じく、カヤック (Kayak 略 K) 部門とカヌー (カナディアン) (canoe 略 C) 部門に分かれる。カヤック (K) 部門は、漕者が艇の進行方向に向かって長座の姿勢で座り、両端にブレード (水かき) のついたパドル (櫂) を左右交互に漕ぎながら艇を前に進める。カヌー (C) 部門では、漕者が艇の進行方向に向かって正座のような姿勢をとり、片方にブレードのついたパドルで左右を漕ぎながら前に進む。

#### (2) 種目

- 男子カヤック1人乗り (K1)
- 男子カヌー (カナディアン) 1人乗り (C1)
- 男子カヌー (カナディアン) 2人乗り (C2)
- 女子カヤック1人乗り (WK1)

#### (3) 競技方法

全長およそ 250~400m のコースに設けられた 18~25 個のゲート (旗門) をゲート番号順に通過しながらゴールまでのタイムを競う。ゲートの設定は大会ごとに任命されたコースデザイナーが毎回デザインするため、同じ競技会場であっても大会が異なればコースの難易度や特徴も変わってくる。設定されるゲートの中には、下流から上流に向かって通過する「アップストリームゲート」が必ず 6~7 個含まれる。それ以外のゲートは上流から下流に向かって通過する「ダウンストリームゲート」である。ゲートを通過できなかった場合は 1 ゲートにつき 50 点、ゲートに接触した場合は同様に 2 点のペナルティポイントが課せられ、ゴールタイムにそれぞれ 50 秒、2 秒が加算される。決められた方向以外に通過した場合も“不通過”とされる。

競技は、選手が一人ずつスタートするタイムトライアル方式である。まず予選で各選手 2 本ずつタイムトライアルを

行い、どちらかの良い方(ポイントの少ない方)が成績となる。準決勝・決勝は1本のみの成績となる。準決勝上位10名のみが決勝へと進み、決勝の1本で最終順位が決まる。

## 2. 今大会の見どころ

北京大会後、ゲート設置に関する規定が変わりシングルポールゲートが登場した。このことにより、各選手のゲートへのコース取りにも大きな違いがでてきており、個人のコース戦略も様々になってきている。ロンドン五輪の会場は流れが複雑に入りこみ、変則的な波をどのようにクリアして戦っていくか?各国、各選手のコース戦略の考えが見て取れる大会であり、どの戦略がこのコースを制すのか、大いに興味がわいてくるレースとなるであろう。

### (1) 今大会の目標

前回の北京大会の代表選手は、全員五輪初出場であった。初めての五輪に圧倒される場面も多く、持っている力を十分に発揮できることなく終えてしまった選手が大半であった。今回は男子はK-1, C-1ともこの北京五輪経験者であり、北京での反省をふまえ、早くからロンドン五輪に向けての課題・強化に取り組んできた。国際競技力も大きく飛躍し、2種目とも入賞、メダルを目指す。一方女子は北京五輪において4位とこれまでの最高位を獲得した。今回は北京五輪4位の竹下は代表の座を惜しくも逃してしまったが、今大会代表の海淵もさらにその上の成績を目指す。

### (2) 日本チームの特徴

北京五輪後、日本選手の苦手とする(不利とされていた)人工コースの流れでのトレーニングを海外において長期にわたり行ってきた。日本国内には人工コースがないが、五輪大会をはじめとする世界選手権大会・ワールドカップのほとんどは人工コースで行われている。そのため、人工コース特有の強く複雑な流れ、ストッパーなどの攻略については、他国(欧米諸国)に比べ劣っていたことは否めない。ロンドン五輪において、メダルを目指すには人工コースでのトレーニングが不可欠である。これらのことから、海外においての長期遠征・合宿を行ってきた。また、人工コースの攻略法・トレーニング法を熟知している海外の優秀なコーチであるミランクバン(スロバキア)コーチを専任コーチに迎え入れ、この2本柱を強化策の中心として進めてきた。

またマルチサポート事業からのサポートも年々充実してきており、体力測定からの分析・合宿・大会での映像分析に加え、食事や心理のサポートも加わり、万全に近い強化体制を取りながら進めることができた。

この環境下で、高い競技レベルをつけてきた選手が五輪代表に選抜されてきており、ここ1.2年で大きな成果をあげてきている。

#### <北京のリベンジを狙う矢澤・羽根田>

矢澤一輝、羽根田卓也は、前述のように北京五輪代表で戦ったものの、初めての五輪とあって、さまざまな面でも思うようなレース展開をできずに終わってしまった。

このことから、基本からのやり直しをし、体力面・技術面はもとよりメンタル面での強化も進めてきた。その結果、昨年の世界選手権大会では、矢澤は国別13位、羽根田は国別7位とメダル照準位置に近づく高い競技レベルまで引き上がってきている。早くからのロンドン五輪に向けての高い意識を持ち合わせている2人は多いにメダルを期待できる選手に成長してきた。

<初出場の女子、海淵萌>

北京五輪で4位という過去最高位の成績を打ち出した女子K-1はその重圧はあるものの、北京を上回る成績をとるというスタンスで強化を行ってきている。海淵は今回初の五輪代表ではあるが、これまで、国内主要大会・アジア最終五輪予選大会ではきっちり照準を合わせ、成績を打ち出してきている。重要な大会においてベストパフォーマンスを発揮させることのできる選手である。このことは自分のことを良く理解できている選手であることの証であり、ロンドン五輪においてもうまく調整をしてくるであろう。

(3) 他国の有力選手

K-1 男子

Daniele Molmenti ダニエレ モルメンティ (イタリア)

2009、2011、2012年ヨーロッパチャンピオン

2010年世界選手権チャンピオン

Peter Kauzer ピーター カウザー (スロベニア)

2010年ヨーロッパチャンピオン

2009年世界選手権チャンピオン

この2人はジュニア時代から競い合い、今や世界のトップに君臨する2人。

このロンドン五輪でも優勝候補の筆頭に上がる。

モルメンティはトップスピードの速さ、カウザーは流れをスピードに変えるテクニックに秀でている。

ロンドンのコースは両者ともに時間をかけてトレーニングを積んでおり、お互いの技術を研究し合っているほど。激しいメダル争いを演じるだろう。

コーチはそれぞれモルメンティがピエルパオラ フェラッチ (バルセロナ五輪チャンピオン) カウザーは父をコーチに持つ。

C-1 男子

Michael Martikan ミハエル マルティカン (スロバキア)

アトランタ五輪 優勝

シドニー五輪 2位

アテネ五輪 2位

北京五輪 優勝

Tony Estanguet トニー エスタンゲ (フランス)

シドニー五輪 優勝

アテネ五輪 優勝

北京五輪 5位

上記の成績から分かる様にオリンピックと言えばこの2人が常に熱戦を繰り広げて来た。

2人とも流れを巧みに使いながら全くストレス無くスムーズにボートを進める技術は他を圧倒する。

今回のロンドンでもお互いのレベルの高い技術がぶつかり100分の1秒の闘いになるだろう。

## 女子K-1

Maialen Chourraut マヤレン チョロー(スペイン)

2009年の世界選手権での2位を皮切りに去年の世界選手権でも3位についている。

ここ最近ではスペインチームの各カテゴリーのレベルが上がって来ており今オリンピックでも女子K-1以外に男子C-1のAnder Elosegiもメダルを十分に狙える位置にいる。

CorinnaKuhnle コリーナ クニユル(オーストリア)

2010、2011年の世界選手権優勝者であり今大会の優勝候補の筆頭。

同国ではVioletta Oblingerと激しいオリンピック出場争いをしてこのロンドンを手にした背景がある。

トップスピードで他の選手に勝りロンドンのコースでもいかに早くトップスピードに乗せるかがカギになる。